

## 性差研究の変遷と最近の動向

有賀美和子

### はじめに—性差研究の萌芽

「性差」が科学的研究の対象となったのは、19世紀後半のことである。それ以前、異質な存在としての男女にみられる能力・特性・役割上の差異は自明の理とされ、それは研究対象とはなりえなかった。19世紀後半に芽ばえたこの領域への関心の要因として、シールズは、ダーウィニズムと機能主義という当時の時代思潮の影響を指摘している。<sup>1)</sup> すなわち、変異性 (variability) の重要性を強調した「進化論」は、性差を含む“行動におけるバリエーション”を研究対象とすることを正当化したというものである。しかし、それらの研究結果が、一般に白人男性の進化論的優越という概念を裏づける付加的データを供給するためのものだった<sup>2)</sup>ことは、言うまでもない。

もう一つの要因は、19世紀後半における教育の普及や産業経済の発展に伴って、女性に対する教育の必要性の有無が社会的関心をよび、また女性の学力や職業的能力が男性に匹敵するか否かへの関心がわいてきたことである。<sup>3)</sup> そうした文脈における性差研究の最初の発見は、かのダーウィンの従弟で「優生学」の祖として知られるゴルトンによるものであるといえよう。“個人差”に着目し、遺伝学に初めて統計的方法を導入した彼は、人間の精神と肉体に関する種々の能力（視・聴覚の鋭敏度、色覚、反射速度、腕力、握力等）を測定し、人体の統計学的調査を進めている。そのような調査の結果として、握力・高音域の笛の音に対する感受性・圧迫下での作業能率では男性が優れ、苦痛に対する感受性では女性が優れているという指摘を彼はおこなったが<sup>4)</sup>、男女の能力に関するその指摘は、以後の主として感覚の領域における性差研究興隆の触媒となった。<sup>5)</sup> こうして男女の知能や特性を比較しよ

うとする関心が誘発され、性差は、人種・年齢・階級等と同様に、個人差を形成する一属性として差異心理学のなかで論じられるようになっていく。

## 1. 性差研究の変遷

ゴルトンに始まる個人差研究は、今世紀に入るとビネーによるIQテスト(1905年)によって具体的にうけつがれ、その後個人差を測定するための各種知能・心理テストが開発されていく。このいわゆる知能テスト・ムーヴメントの発展とともに、能力における性差研究は新たな段階に入るが、この段階における性差研究は一般に、男性という人間の規準から女性がいかに異なっているか(=劣っているか)の記述を中心とすることによって、性差別を擁護する役割を果たしてきたことは否めない。<sup>6)</sup>しかしながら、たとえばスタンフォードの心理学者ターマンは1916年にビネー式テストのアメリカ版ともいべきスタンフォード・ビネーを作成したが、<sup>7)</sup>ビネーもターマンも、全体的知能に性差は存在しないという前提にたって自らのテストを構成したことは、注目に値しよう。<sup>8)</sup>ターマンのIQ測定において女兒は男児と同様にスコアするばかりで、職業への女性のアクセス制限は、不公平であるのみならず才能の浪費であると、彼はいくぶん皮肉をこめて述べている。<sup>9)</sup>

知能テスト・ムーヴメントにおける次の段階は、1930-40年代におけるサーストンによるPMA(Primary Mental Abilities)テストの発展である。<sup>10)</sup>それまでのビネー式を基調とする知能テストは「全体的知能」という概念に基づき、個々人のシングル・スコアとしてIQをはじき出すものだった。これに対してサーストンは、人間にはマルチプルな知的能力が存在し、それらは統計的技法を用いて特定できるとした。空間・知覚・数・言語・記憶・語の流暢さ・帰納的推理という7つの基本的精神能力因子(primary mental ability factors)から成るマルチプルな能力としての知能というこの概念化は、その後の言語能力・数学能力・空間認知能力を中心とする性差研究のための基礎を提示した。<sup>11)</sup>こうして1930年代までに、能力における性差研究の実体ある考察をおこなうためのデータが蓄積され始める。

このように主に心理学における性差研究の観点は、知的能力における男性の優越が自明視された前世紀までの固定的な見地から、今世紀に入ると、男女いずれが優れているかという優劣差の認識へ、そして1930年代に入って、いかなる能力において男女は優れているかという特性認識へと変遷する。さらに、男女の性格形成の違いにみられる文化的・社会的条件を強調したミードの文化人類学的アプローチ<sup>12)</sup>や、男女の生物学的差異よりも心理的反応における男女差を重視するターマンとマイルズによる性度テストの導入<sup>13)</sup>等を契機として、「女らしさ・男らしさ」とは、各々の社会における文化のあり方やその時代的変遷によって大きく異なり、同一時代の同一社会でも、人種・年齢・教育レベル・職業等の下位集団の及ぼす影響がきわめて強いものとして捉えられるべきであるという認識が定着した。<sup>14)</sup>そしてそれは、戦後からの大きな動向である、男女の行動や特徴の違いを「性という社会的地位」に付帯する役割行動の獲得として捉える性役割 (sex role) 研究の飛躍的發展へとつながることになる。

それぞれの詳述は割愛するが、性役割研究の系譜には、子どもの自我発達から捉える立場として、フロイト理論に基づく発達の性同一視理論、ミッシェルに代表される社会学習理論、ピアジェの理論に基づくコールバーグらの認知発達理論があり、役割の社会化として捉える社会学的アプローチとしてはパーソンズらによる機能主義的理論や、ベイカンによるエイジェンシー対コミュニオン理論等がある。それらの諸研究に共通するのは、性差を測定し比較し記述するという従来の静態的な捉え方とは異なる、性による役割が獲得されるメカニズムとプロセスやその文化的・社会的条件を明らかにしようとする動態的な性差の捉え方である。すなわち性差をみる視点は、男女の優劣という量的差異から特性上の質的差異へ、さらに役割上の差異へと変遷していったのである。

しかしながら、性役割獲得のメカニズムに関連して、強い情緒的結合をもつ他者への性心理学的愛着をその動因とする性同一視理論にせよ、行動への評価や報酬・処罰をその動因とする社会学習理論にせよ、子ども自身の自己

イメージをめぐる認知構造の発達をその動因とする認知発達理論にせよ、その基底には、性差に関する“二項対立主義”ないし“行動決定要因論”が流れていた。一方、一般に社会科学の分野では「社会化」という概念の下に、出産・育児といった生物学上の機能差とならんで、たとえば親の養育態度にみられる男児に対する自立や競争の奨励が、自立心や達成を求める男性役割を導き、女児に対する自立や競争の抑制が、依存性や受動性に基づく女性役割を導くといった前提が仮定され、そこにもまた性役割の二分法が存在していた。よく知られた一例としては、家族における父親の道具的役割（集団と外界との対外関係に関する実際の配慮を中心とする）と母親の表出的役割（集団構成員間の調和や統制の維持にあたる）というパーソンズらによる分類がある。<sup>15)</sup> しかし他方さきのベイカンによる研究の見解は、男女は agency（作動性）と communion（共同性）という基本的な二つの機能（前者は個人の自己主張・自己維持・自己拡張として現われ、後者はより大きな集団との関連のなかで協力・融和を目ざす）を分有しており、前者を後者によって緩和しながら両者のバランスをとることによって成熟した発達が得られるというものであり、それはその後の男性性 (masculinity)・女性性 (femininity) の内実を問う研究への一つの端緒となったといえるであろう。

1970年代に入ると、男性性・女性性を対極の概念としてみる従来の一次元的尺度に代わって、男性性・女性性という概念そのものは認めながら、それらの特性を独立のものとしてみる二次元的尺度に基づく研究があらわれる。ベムによるアンドロジニー（両性具有性）概念はその代表的なものといえるが、<sup>16)</sup> この概念の基本は、従来男女に別々に期待されていた男性性・女性性という特性をともに兼ね備えることが、行動の柔軟性と環境への適応力に富む「望ましい人間のあり方」であり、高度な性タイプ化は、適応や能力発達に不利な結果を招いているというものである。

一方この時期には、それまでの性差研究を展望し、性差の存在そのものを問う著作が刊行されている。マッコビイとジャクリンの『性差心理学』（1974）<sup>17)</sup> は、それまでの性差研究の集大成ともいわれるが、彼女らは 1960

年代から 73 年にかけて発表された 1400 編余の性差研究を総覧した結果、学問的確証をもって規定できる性差はごく少なく、女性の言語能力の優位性と男性の視覚的空間認知能力・数学能力・攻撃性の優位性のみであると結論づけている。<sup>18)</sup> それまでの通念といえる女性の社交性の高さ、他人からの影響の受け易さ、自己評価の低さ、機械的学習や反復作業への適性や達成動機の欠如等は、ここでは学問的に実証されえなかった。そしてその後の膨大な性差研究の蓄積によって次第に解明されてきたものは、それまでの心理学的性差に関する通説の不確実性である。

## 2. 性差研究の新しい動向

1976 年の時点でハイドとローゼンバーグは、それまでの性差研究には統計学的欠陥が多いことを指摘し、研究結果の再評価を主張しているが、<sup>19)</sup> ハイドによれば、1980 年代に入って「メタ分析」(meta-analysis) とよばれる新しい統計的方法の発展が、能力における性差研究をラディカルに変えてきた。<sup>20)</sup> 以下、従来の研究結果の再評価を伴ったその新しい動向について紹介し、今後の性差研究の展望をさぐってみたい。

メタ分析とは、多種の諸研究の数量的データを結合した計量的な方法を用いたものであるが、その分析のために、個々の性差分析に関する有効な統計的サイズである  $d$  値がコンピューター化されており、研究者はしばしば非常に大きな研究サンプルを得ることができる。<sup>21)</sup>  $M_M$  が男子スコアの平均値、 $M_F$  が女子スコアの平均値であるとき、 $d = (M_M - M_F) / s$  ( $s$  は男女を含めた全体の標準偏差) である。つまり  $d$  値とは、男女の中間値が標準偏差のユニットにおいてどの程度離れているかを示しており、 $d$  が正のときは女性より男性のスコアが高いことを意味し、 $d$  が負のときは男性より女性のスコアが高いことを意味している。ここで例えば  $d = \pm .40$  は、片方の性の 40% が両性の平均より上位にあり、もう一方の性の 60% が同じ平均よりも上位にあることを意味している。因みにひとつの目安として、コーヘンは、 $d = \pm .20$  では性差が小、 $\pm .50$  で中、 $\pm .80$  で大というガイドラインを提示し

ている。<sup>22)</sup>

最初のメタ分析は、1981年にハイド自身によって発表された。そのなかで彼女はマッコビイとジャクリンによる先行研究<sup>23)</sup>における $d$ 値を再計算し、言語能力で $d = -.24$ 、空間認知能力で $d = .45$ 、数学能力で $d = .43$ という結果をえたが、<sup>24)</sup>これらの結果は、先行研究において指摘されたほど性差が顕著ではないことを示している。すなわち、言語能力における性差は小さく、空間認知能力および数学能力における性差は、中位以下のものである。

能力における性差はしばしば、特定の職業における男女比率の不均衡を説明するために用いられてきた。メタ分析は、そうした説明が適切かどうか吟味することを可能にしたといえよう。たとえば、高い視覚的空間認知能力が必要とされるエンジニアの場合、一般に女性エンジニアの比率はきわめて低い（米国で5パーセント以下）、かりに95パーセンタイル値以上の空間認知能力がエンジニアに要求されるとして、空間認知能力における性差 $d = .40$ と仮定すれば、この職業における適正な男女比率は2:1あるいは男性67%、女性33%であることが、ハイドによって指摘されている。<sup>25)</sup>こうした研究結果は、まさにエンジニアの男女比率を是正することに貢献しうるであろう。

さらに、フェミニスト的見地からみた $d$ 統計の長所のひとつは、それが性差—男女の中間値の間の差異—のみならず、同性内における流動性（標準偏差 $s$ ）にも注目している点である。つまりそれは、それぞれの性が、均質ではないことを認めており、そこでは同性間の差異が異性間の差異よりも大きい場合もありうる。またある能力における性差が単に大きいか小さいかという評価に留まらず、その差異がどの程度のものであるかという正確な評価を可能にし、さらにたとえば言語能力全体に幾つかの部分集合（語彙力、読解力等）を設定し、それぞれの種類の言語能力における性差を比較することもできる。

ハイドによる1981年の研究に続いて、リンとペーターセンは、視覚的空間認知能力に関する三つのタイプの能力における性差について分析したが、

それによれば、水平・垂直感覚における性差  $d = .44$ ，多面体図形の回転感覚における性差  $d = .73$ ，図形抽出能力における性差  $d = .13$  であった。<sup>26)</sup> またそのなかで彼女らは、空間認知能力における性差に関する年齢傾向について分析し、性差が存在するところでは、それが年齢に関係なくライフ・スパンを貫いて存在することを示しているが、それはマッコビイとジャクリンの先行研究における見解—空間認知能力における性差は性徴期までは現われず、したがってそれはおそらく思春期におこるホルモン等の生物学的変化の結果であるというもの—の誤りを指摘するものであった。しかしながら、前記第2のタイプの空間認知能力における大きな性差が、生物学的性差に起因するのか、あるいは社会化に起因するのかに関する問題は、なお未解決のものとして残っている。

一方、言語能力における性差は、ハイドとリンによって分析されているが、それによれば、言語能力全体における性差  $d = -.11$ ，タイプ別では、語彙力における性差  $d = -.02$ ，読解力における性差  $d = -.03$ ，文章力における性差  $d = -.09$  であり、言語能力における性差は殆ど存在しないということが結論づけられている。<sup>27)</sup>

また、因果帰属 (causal attribution) における性差に関するメタ分析もおこなわれている。因果帰属とは、たとえばある試験で A をとった場合、自身の能力・運・問題の難易度・自身の努力という四つのうちのどれをもってその原因と考えるかという性向である。社会心理学の分野において、能力および努力は内的帰属、運および課題の難易度は外的帰属と分類されているが、従来のコンセンサスは、男性に比べて女性が自らの成功に対しては外的帰属をおこない、自らの失敗に対しては内的帰属をおこなう傾向があるというものだった。それはしばしば、学問的・職業的達成における女性の劣位を説明するために用いられてきたが、フリーズらのメタ分析は、それに関する性差がわずかであることを明らかにした。すなわち、たとえば成功に対する能力への帰属における性差  $d = .13$ ，失敗に対する能力への帰属における性差  $d = .16$  であり、<sup>28)</sup> 因果帰属における性差に関して広く固定されていた女性

の劣位モデルが、斥けられたのであった。

### 3. 社会的行動における性差に関するメタ分析

さて、これまで主に認知能力における性差について述べてきたが、他方、社会心理学的側面における性差に関するメタ分析も数多くおこなわれ、興味深い諸結果を生みだしている。

女性は男性に比べて他人の影響や暗示をうけやすく、従順で依存的であるという見解が、これまでコンセンサスであった。従順性は、たとえばあらかじめ用意された複数の誤答者のなかで直線の長さを判断させる実験において、被験者が同じ誤答をおこなう程度によって測られる。この実験を用いたメタ分析においてイーグリーとカーリーは、男女の答えにおける性差が小さいことを発見した。そこでは、他の実験も含んで得られた従順性全体における性差  $d = -.16$ 、上述の集団的圧力を設定した場合の性差  $d = -.32$ 、設定しない場合の性差  $d = -.28$  であり、<sup>29)</sup> 従順性に関する有意の性差は斥けられたのであった。

またホールは、表情判断や凝視や対人関係における性差に関するメタ分析を報告しているが、<sup>30)</sup> それは、他人の非言語的行動刺激の理解 ( $d = -.42$ )、表情のよみ取り ( $d = -.34$ )、非言語コミュニケーションを用いた情緒の表現 ( $d = -.50$ )、表情の表現 ( $d = -.90$ )、対人関係における親密性 ( $d = -.86$ )、スピーチ・エラーの少なさ ( $d = -.66$ )、において女性が優っていることを示している。これらの性差は、前述の空間認知能力や言語能力における性差よりもかなり大きい。

次にイーグリーとクローリーは、援助行動 (helping behavior) における性差に関するメタ分析をおこなった。<sup>31)</sup> 彼女らの分析によれば、援助行動における性差を画するファクターは、場面設定における“危険”の有無であり、たとえばタイヤのパンクによる路傍駐車を援助することにおいては男性が優り、神経症の児童へのボランティア援助においては女性が優っていた。こうして彼女らは、男性の性役割が勇敢で勇ましい援助を助長し、女性の性役割



が養育とケアに関する援助を助長するという社会的役割理論上の仮説を導いたのである。ここで、もし女性役割に規定された“養育とケア”に関する援助行動が、他者との長期的で親密な諸関係において最も起こりうるものであると仮定されるならば、主に社会心理学の領域において、他者との短期的対面の文脈でとりあげられる傾向のある援助行動研究のあり方も、再検討をせまられてくるかもしれない。

また攻撃性における性差に関するハイドのメタ分析において、攻撃性全体の性差  $d = .50$ 、年齢別では、年少者ほど性差が大きい傾向（たとえば6歳以下で  $d = .58$ 、大学生で  $d = .27$ ）がみられた。<sup>32)</sup> 一方、大学生を対象としたイーグリーとステファンによる攻撃性分析においては、全体の性差  $d = .29$  であったが、心理的攻撃が含まれた場合の性差  $d = .18$ 、身体的攻撃が含まれた場合の性差  $d = .40$  であり、弱者を害する行動に罪悪感を覚えたり、危険を感じる場面において性差が大きいと結論づけている。<sup>33)</sup> これは、イーグリー自身らの先の社会的役割理論とも一致するものであるといえよう。

さらに、性差が、時代とともに減少してきたという興味深い研究結果が提示されている。たとえば攻撃性における性差は、1966年から73年にかけて発表された諸研究のメタ分析では  $d = .53$ 、また1978年から81年の間に発表されたものでは  $d = .41$  であったという。<sup>34)</sup> 他にも類似の傾向として、1973年以前の諸研究のメタ分析では言語能力における性差  $d = -.23$ 、1973年以降のものでは  $d = -.10$  という研究結果がある。<sup>35)</sup> こうした研究結果は、過去20年間に於いて性差が減小に至ってきた過程に関する種々の社会的分析に対して、注目すべき証拠を提供しうるであろう。

## おわりに

これまで述べてきたような性差に関するメタ分析が始まる以前までのコンセンサスは、男女の全般的な知能に差異はないが、言語能力において女性優位、数学能力・空間的認知能力において男性優位の性差が存在するというものだった。しかしながら、研究結果の量的蓄積を用いて性差における種々の

パターンに関する精査をおこなうメタ分析によって、空間的認知能力における性差は多面体回転能力を除いて一般に大きいとはいえず、数学能力における性差は中位のものであり、言語能力における性差は殆ど存在しないということが明らかになってきた。また、攻撃性や援助行動といった社会的行動の領域では、一般に非言語行動における性差は他の性差よりも大きく、女性の対人関係における親密度は男性のそれに比べて高い（他人との距離が近い）ことが明らかになってきた。さらに最近の動向として、全般的な性差が減少する傾向にあることが指摘されてきている。

むろん、各研究にあらわれた性差の度合いは、その研究に固有のセッティングや方法論にある程度依存する。またとりわけ社会的行動は、文化・年齢・社会階層・人種といった多くの変数とプロセス間の複雑な相互作用の結果であり、どの理論もそれらすべての要因を包括し、「絶対的真理」を一度に解明するものではないだろう。<sup>36)</sup> 従来までの性役割観が再検討をせまられて久しい社会的現実からの要請に応えるものとして、性差に関するよりシステマティックでバイアスの少ない統計学的手段を開発していくことは、今後の課題としてなお残されている。そしてその過程において、性差に関する数多くの神話が、書き換えられていくであろう。

#### 註

- 1) Shields, S. A., "Functionalism, Darwinism, and the Psychology of Women: A Study in Social Myth," *American Psychologist* 30, no. 7 (July 1975), pp. 739-54.
- 2) Hyde, J. S., "Meta-Analysis and the Psychology of Gender Differences," *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 16, no. 1 (Autumn 1990), pp. 55-73, p. 56.
- 3) 間宮武『性差心理学』（金子書房、1979年）、p. 15.
- 4) Galton, F., *Human Faculty* (London, 1883).
- 5) 伊藤裕子「心理学における性差研究の動向とその社会的背景」、『女性学年報』第5号（1984年11月）、p. 23.
- 6) 賀谷恵美子「性役割の社会化」, 女性社会学会研究会編『女性社会学をめざして』（垣内出版、1981年）、p. 114.
- 7) Terman, L. M., *The Measurement of Intelligence* (Boston: Houghton Mifflin, 1916).

- 8) Hyde, *op. cit.*, p. 58.
- 9) Terman, *op. cit.*, p. 72.
- 10) Thurstone, L. L., *Primary Mental Abilities* (Chicago: University of Chicago Press, 1938).
- 11) Hyde, *op. cit.*, p. 58.
- 12) Mead, M., *Sex and Temperament in the Three Primitive Societies* (London: Routledge & Kegan Paul, 1935). なお、ミードによる後年の著作 *Male and Female*, 1949 (田中寿美子・加藤秀俊訳『男と女』上・下, 東京創元社, 1961年) のなかの一節「どの社会でも, 人類は, 男女間の差異の最初の手がかりとなった, 本来の生物学的な差異とはずっとかけはなれているような形態にまで, 男女間の生物学的差異をしばしば精巧に仕立てあげてきている」というくだりは, “文化的性差” のありようを端的に表わすものとして, しばしば引用される。
- 13) Terman, L. M., and C. C. Miles, *Sex and Personality* (New York: McGraw-Hill, 1936).
- 14) 賀谷, 前掲書, p. 114.
- 15) Parsons, T. and R. F. Bales, *Family, Socialization, and Interaction Process* (London: Routledge & Kegan Paul, 1956). 橋爪貞雄他訳『核家族と子どもの社会化』上・下 (黎明書房, 1970年).
- 16) Bem, S. L., “The Measurement of Psychological Androgyny,” *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 42, no. 2 (1974), pp. 155–62.
- 17) Maccoby, E. E. and C. N. Jacklin, *The Psychology of Sex Differences* (Stanford, California: Stanford University Press, 1974).
- 18) *Ibid.*, pp. 349–55.
- 19) Hyde, J. S. and B. G. Rosenberg, *Half the Human Experience* (Lexington, Massachusetts: Heath, 1976), pp. 59–65.
- 20) Hyde, “Meta-Analysis and the Psychology of Gender Differences,” p. 61.
- 21) *Ibid.*, p. 61.
- 22) Cohen, J., *Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences* (New York, Academic Press, 1969).
- 23) Maccoby and Jacklin, *op. cit.*
- 24) Hyde, *op. cit.*, p. 64.
- 25) *Ibid.*, p. 64.
- 26) Linn, M. C. and A. C. Petersen, “Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability: A Meta-Analysis,” *Child Development* 56, no. 4 (December 1985), pp. 1479–98.
- 27) Hyde, J. S. and M. C. Linn, “Gender Differences in Verbal Ability: A Meta-Analysis,” *Psychological Bulletin* 104, no. 1 (July 1988), pp. 53–69.
- 28) Frieze, I. H., et al., “Assessing the Theoretical Models for Sex Differences in Causal attributions for Success and Failure,” *Sex Roles* 8, no. 4 (April 1982), pp. 333–43.
- 29) Eagly, A. H. and L. L. Carli, “Sex of Researchers and Sex-typed Communications as Determinants of Sex Differences in Influenceability: A Meta-Analysis of Social Influence Studies,” *Psychological Bulletin* 90, no.

- 1 (July 1981), pp. 1-20.
- 30) Hall, J. A., *Nonverbal Sex Differences: Communication Accuracy and Expressive Style* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1984).
  - 31) Eagly, A. H. and M. Crowley, "Gender and Helping Behavior: A Meta-analytic Review of the Social Psychological Literature," *Psychological Bulletin* 100, no. 3, (November 1986), pp. 283-308.
  - 32) Hyde, J. S., "How Large Are Gender Differences in Aggression?: A Developmental Meta-Analysis," *Developmental Psychology* 20, no. 4 (July 1984), pp. 722-36.
  - 33) Eagly, A. H. and V. J. Steffen, "Gender and Aggressive Behavior: A Meta-analytic Review of the Social Psychological Literature," *Psychological Bulletin* 100, no. 3 (November 1986), pp. 309-30.
  - 34) Hyde, "Meta-Analysis and the Psychology of Gender Differences," p. 71.
  - 35) Rosenthal, R. and D. B. Rubin, "Further Meta-analytic Procedures for Assessing Cognitive Gender Differences," *Journal of Educational Psychology* 74, no. 5 (October 1982), pp. 708-12.
  - 36) この点については、有賀美和子「フラックスの『ジェンダー論』」, 東京女子大学紀要『論集』第40巻, 第1号 (1989年9月), pp. 120-21. および有賀美和子「『経済的依存性』とジェンダー」, 東京女子大学紀要『論集』第41巻, 第2号 (1991年3月), pp. 129-30. を参照されたい。